

目的 第一報と同様の目的をもって、第二報では、英国における事例を報告する。積極的かつ活動的な高齢者の生活歴および地域活動等から、「高齢者にとって意義ある生活」をもたらす主体的要因を探る。

方法 1993年8月、英国ヨーク市の老人ホーム入居者および近郊に居住する高齢者の面接調査を行い、個人の生活歴および現在の生活に関する回答を得た。老人ホームにおける回答者5人は、いずれも単身女性（未婚1・死別4）であり、年齢は75才以上であった。これに対して、在宅の回答者は、いずれも夫婦2人暮らしをしている4カップルのうちの7名であり、年齢は75才未満である。

結果 今回の事例から、「高齢者にとって意義ある生活」を実現する主体的要因の手がかりと考えられることは、次のとおりである。老人ホーム入居者に共通することは、日常的介護の必要はなく、食事や清掃サービスを必要に応じて受けながらも、独立した生活を送っていること。精神面でも、それぞれが自立した生活を望み、個人のプライバシーが尊重されることに満足感を覚えている。また、入居希望者などの見学には入居者自身が案内を行うなど、ホームに対する誇りや積極性がうかがえる。在宅者においては、夫婦共に引退後の生活設計に早期に取り組み、夫婦単位の独立した生活を主体的に選択している。地域の学習機会において、各自の人生経験を活かして教える側にもまわり、相互に学びあう関係を創り出している。両者に共通することは、高齢者自身の自立を前提として、子供や近隣居住者との人間関係を築いていることといえよう。